

金山・銀山

新潟県沖にある佐渡島は、江戸時代（1603～1868 年）に金銀採掘で好景気に沸き、島の鉱山では日本全国から集まった何千人という労働者が働いていました。鉱山は 1989 年まで操業し、何世紀にもわたって計 78 トンの金を産出しました。これは日本で 2 番目の産出量となっています。

佐渡島における貴金属採掘に関する最初の記録は、1185 年のものですが、産出量がピークに達したのは 17 世紀および 18 世紀になってからです。銀は、佐渡島の鶴子で発見され、1542 年から 1946 年まで採掘されました。1601 年からは「道遊の割戸」が主要な金鉱山のひとつとなり、この山はたいへん深く掘り進められ、文字通り山が半分に分かれました。

江戸時代に日本を統治した徳川幕府は、鉱山の支配権を握り、主に当時日本全土で貨幣として使われた楕円形の小判など、産出された金を使って貨幣を鋳造しました。幕府は佐渡島に奉行を送り込み、鉱山の監督をさせました。奉行は、掘削および産出のプロセスを説明した詳細な絵図が豊富に描かれた巻物を使って、江戸（現在の東京）に報告を行いました。それら巻物の 150 巻ほどが日本国内や海外で見つかっており、伝統的な採掘技術を理解するための貴重な史料となっています。

これら伝統的な慣行のひとつは「大流し」と呼ばれる砂金の採取です。「大流し」では水を使って、菌が含まれる砂やより軽い石を洗い流し、そうすることで金の粒子を選り分けます。伝統的な鉱山技術は、江戸時代の終わりまで採用されていましたが、その頃にはすでに時代遅れとなり、鉱業も衰退し始めました。日本が外国の影響力を受け入れるようになり、近代的な鉱山技術など、国外の技術を導入し始めた後、鉱業は復活しました。

佐渡島では、今でも金銀採掘の歴史を目で確認することができます。ゴールドラッシュ最盛期の人口増加に対応するため、主要な採掘地であった相川近くの丘の斜面に作られた棚田の多くは、現在も使われています。鉱石から金を抽出するために西洋式技術が取り入れられた、北沢浮遊選鉱場といった建造物(跡)が今でも残っています。

来訪者は、相川にある「きらりうむ佐渡」や史跡佐渡金山で、その歴史を広範に学ぶことができます。「きらりうむ佐渡」はビデオやその他展示を使って、採掘の歴史を詳しく説明している情報センターです。史跡佐渡金山では、江戸時代と明治時代（1868～1912 年）に使われていたままの状態で保存された採掘坑に入ることができます。さらに、相川の南にある西三川で始まった「大流し」による金採取を体験することもできます。